

2021年9月19日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

詩編 130 : 1～8

ルカによる福音書 18 : 1～8

「気を落とさずに祈る」

<祈ること>

イエスさまは、「気を落とさずに絶えず祈らなければならない」ことを教えられた、とあります。「祈る」というのは、神さまと対話することであり、神さまの呼びかけに応答することであり、神さまに寄り頼むことです。そうして、神さまと共に歩いていくこと。神さまとの親しい関係の中を歩いて行くこと。それが、わたしたちが神さまに祈るということです。祈ることは、わたしたちの信仰生活の中心です。

そして、イエスさまは今日のところで、「気を落とさずに絶えず祈らなければならない」と言われました。それはつまり、わたしたちがこの世の中を、神さまを信じて、神さまに寄り頼んで生きていこうとする時に、気を落としてしまいそうになることがある。祈ることを止めてしまいそうになることがある、ということでしょう。イエスさまは、わたしたちのことを、まったくよくご存じなのです。

イエスさまは前回までの17章のところで、神の国、つまり神のご支配について、教えて下さいました。

神の御子イエスさまは、わたしたちの罪の贖いのために十字架の苦しみを受けて死んで下さるために、この世に遣わされました。このイエスさまにおいて、わたしたちを支配していた罪と死を打ち破る、神さまの恵みのご支配、命のご支配が、すでに始まっているのです。

弟子たち、わたしたちは、イエスさまと出会うことによって、すでにこの世に実現している、神の命のご支配の中を、生き始めているのです。

しかし、イエスさまがもう一つ教えられたことは、この神のご支配は、未だ完成はしていない、ということでした。

わたしたちがイエスさまを知り、神のご支配に生き始めたとしても、一方では、まだ神のご支配を知らない人々や、神のご支配を受け入れない人々がいます。その中で、イエスさまを信じる者が迫害を受けたり、苦しめられたりすることも起こります。さらには、わたしたち自身、罪を赦された者であるにも関わらず、罪を繰り返してしまう弱さ、罪への誘惑や悪に傾いてしまう無力さを覚えつつ歩んでいます。そういう意味において、神の国はまだ完成していない。誰の目にも完全に明らかになってはいないのです。

そんな中で、わたしたちが、自分の弱さや、無力さや、罪のどうしようもなさを見つめて

しまう時、わたしたちは神さまを見つめることをやめて、気を落としたり、祈ることができなくなったりするのです。

あるいは、世の争いや、悪や、悲惨さを目にする時に、それは、神さまが祈りに応えて下さらないからだ、働いて下さらないからだ、と考えたり、神さまに見捨てられてしまったのではないかと疑って、虚しい思いになってしまったりするのです。

しかしそのような時こそ、わたしたちは「気を落とさずに絶えず祈らなければならない」、つまり、「希望を持って祈り続けなければならない」とイエスさまは言われるのです。

イエスさまは、やがて人の子の日が来る、と語られます。それが、イエスさまが再び来られて、神のご支配を完成させて下さる日です。その日は必ず来るし、やがて誰の目にも、神のご支配が必ず明らかになるのです。これは、確かな約束です。

だから、わたしたちが苦しみや悲惨ばかりに見える現実の中でも、神の国を実現して下さったイエスさまの十字架を見つめて、わたしたちの重荷を背負って下さったイエスさまを見つめて、終わりの日、イエスさまが再び来られる日を確信して、祈りつつ待ち望むべきである。それを、イエスさまはこれまでも語ってこられたのです。

<やもめと不正な裁判官>

さて、今日の箇所は、そのことを教えるために、イエスさまが、やもめと不正な裁判官のたとえを話されたところです。

やもめとは、夫を亡くした女性のことですが、当時は社会的にも経済的にも、最も弱い立場の一人でした。

このやもめが、ある町の裁判官のところに来ては、「相手を裁いて、わたしを守ってください」と言っていた、とあります。これは、やもめが何度も何度も繰り返し来て、訴えていた、ということを表す表現です。

やもめは最も弱い立場の代表のようなものですから、彼女が言う裁判の「相手」は、やもめよりも力のある、強い立場の人であることは間違いありません。それで、彼女は自分を守るために、裁判官に訴えるしかなかったのです。「守ってください」という言葉は、「復讐する、罰する、正義を得させる」という意味の言葉です。やもめは、社会的に弱い立場の自分が守られるために、公平で正しい裁きが行われることを望み、繰り返し訴えたのです。

一方で裁判官。6 節でイエスさまは「不正な裁判官」と言っておられます。裁判官とは、社会において正義が全うされるために、人と人之間を裁いて、正しいか、正しくないかの判断を下す人です。この、正しさを決める人が、不正である、というのは、もう最悪のことだと言って良いでしょう。

当時のユダヤ人の中で、裁判官に求められることは、旧約聖書、例えば歴代誌下 19 章には、こうあります。「彼は裁判官に言った。『人のためではなく、主のために裁くのがだから、自分が何をすべきか、よく考えなさい。裁きを下すとき、主があなたたちと共にいてくださ

るように。今、主への恐れがあなたたちにあるように。注意深く裁きなさい。わたしたちの神、主のもとには不正も偏見も収賄もない。』裁判官は、神さまの正しさを全うするために、神を恐れつつ裁きを行なうことが求められています。

それに、イザヤ書1章では「善を行うことを学び／裁きをどこまでも実行して／搾取する者を懲らし、孤児の権利を守り／やもめの訴えを弁護せよ。」とあり、特に弱い立場の孤児ややもめを守るようにと命じられています。

ところが、2節にあるように、この裁判官は「神を畏れず人を人とも思わない裁判官」であり、自分でもそのように言っていました。

この裁判官は、神がまことの支配者であり、彼らの業をご覧になっており、終わりの日にまことの裁きを行なわれる、ということを信じていないのです。その恐れが全くない。ですから、神さまの御心に従うのではなく、自分の思いに従い、自分の損得で動きます。正しさの基準が、神ではなく、自分にある。自分が、これが正しいと決めたら、そうなる。そんな、不正な裁判官なのです。

わたしたちも、今の世の中においても、神を基準としないところで、人の思い、国の損得、誰かが判断する正しさが基準となっている現状を見るのではないのでしょうか。そのために、本当に守られるべき人が守られない。本当の正しさが曲げられている。そんなことが起きているのではないのでしょうか。

さて、そんな人間の思いが支配する世の中で、この立場の弱いやもめも苦しんでいました。それで、正しい裁きを望み、裁判官のところへ行っただ。これは正しい行動です。でも彼女の町の裁判官は、残念なことに、この不正な裁判官しかいませんでした。

それでも、やもめには、他に手段がありません。だから彼女は、訴えるべきところに、ひたすら訴えに行くしかなかった。叫び続けるしかなかった。そんな状況なのです。

<しぶしぶ?>

さて、4節には、このやもめの訴えに対して、裁判官はしばらくの間は取り合おうとしなかった、とあります。適当にあしらい、放っておいたのでしょう。でも、ずっとしつこく訴えてくる。それで、とうとう彼はこう考えるに至りました。

「自分は神など畏れないし、人を人とも思わない。しかし、あのやもめは、うるさくてかなわないから、彼女のために裁判をしてやろう。さもないと、ひっきりなしにやって来て、わたしをさんざんな目に遭わすにちがいない。」

裁判官は思うのです。自分は神など畏れていない。別に、正しいことをしなくたって構わないと思っている。自分がよければ、人の事なんかどうでも良い。でも、もうやもめがうるさくて、しつこくてかなわないから、仕方なく裁判をしてやろう。

聖書には、「さもないと、ひっきりなしにやって来て、わたしをさんざんな目に遭わす」

とあります。この、さんざんな目に遭わす、とは、殴って目の下に隈を作らせる、という意味だそうです。つまり、あのやもめはいい加減何かしてやらないと、終いにわたしをぶん殴ってくるかも知れない。さすがにそれはごめんだ。そう思わせるほどの、訴え方だったということでしょう。それで、ようやく腰を上げて裁判をしてやろうと思った、というのです。

でもそれはつまり、この不正な裁判官は、最後まで「やもめのため」ではなくて、「自分のため」に動いた、ということです。やもめの熱心さによって、裁判官が回心したとか、憐れみの心を持ったとか、そういう話ではありません。結局、裁判官は、自分に面倒が起らないために、殴られないために、しぶしぶ動いたのです。

<まして神は>

さて。ここでわたしたちは、ちょっと戸惑うかも知れません。イエスさまが、わたしたちに「気を落とさずに絶えず祈らなければならない」とたとえて、これを語られた、というのは、どういうことなのでしょう。

わたしたちは、やもめみたいに諦めず、熱心に、相手を動かすほどに、頑張っって祈り続けなければならない、ということかな、と思ってしまうかも知れません。

すると、こんな疑問を持つかも知れません。神さまは、不正な裁判官のように、わたしたちの熱心さに根負けして、しぶしぶ祈りを聞いて下さるということだろうか。頑張っって祈り続けなければ、祈りに応えて下さらない、ということだろうか。

でも、もちろん、ここで語られているのは、そういうことではありません。

まず、神さまは、不正な裁判官ではありません。7節には、こうあります。「まして神は、昼も夜も叫び求めている選ばれた人たちのために裁きを行わずに、彼らをいつまでもほうっておかれることがあろうか。」

ここで言われているのは、不正な裁判官でさえ、その動機はどうであれ、やもめの訴えを聞き入れるのだ、ということです。

「まして神は」です。まして神は。これが、大事です。まして、あなたがたのために独り子を遣わし、その命を与え、罪を赦し、滅びから救い出して下さる神は。ご自分の子供として、あなたがた罪人を喜んでお迎えになる神は。あなたがたに「父」と呼ばれることを喜ばれる神は。…裁きを行わずに、あなたがたをいつまでも放っておかれることがあろうか。いや、あるはずがない。そんなはずがないではないか。そういう意味なのです。

だから、気を落とさなくて良いのだ。期待して、希望を持って良いのだ。諦めなくて良いのだ。祈ることを止めてはならないのだ。

イエスさまは、神さまが祈りを確かに聞いて下さる方だからこそ、わたしたちに祈ることを諦めないように、確信を持って祈るようと、励まして下さっているのです。

それに、不正な裁判官は、やもめとは何の関係もなく、本当に彼女のことをどうでも良いと思っていたと思います。でも、イエスさまは、祈るわたしたちのことを、「昼も夜も叫び求めている選ばれた人たち」と言って下さいました。

「選ばれた人たち」。神さまが選び、罪から救い出し、命を与え、ご自分の子どもとして、神の民として選んだ人たち、ということです。神さまから、積極的に手を差し伸べ、関わり、救い出し、関係を結んで下さった人たちです。

不正な裁判官でも、関心のないやもめのために、裁きを行なった。まして神は、ご自分が選んだあなたたちのために、正しい裁きを行なわれるに決まっているのではないか。ほうっておかれることがあるだろうか。いや、決してない。そう言われているのです。

イエスさまは、ここで、神さまがどういうお方であることを示して下さっています。

わたしたちは、苦しみから抜け出せない時、困難の出口が見えない時に、神さまが裁きを行なって下さらない。祈りに応えて下さらない。そう思うことがあるかも知れません。わたしたちこそ、神さまが、正しいことを行なって下さらない、不正な裁判官なのではないかと、疑ってしまうことがあるかも知れないのです。

でも、イエスさまは言われます。神は、不正な裁判官などではない。必ず、裁きを行なって下さる方である。確実に信頼できる方である。最後まで希望をおくべき方である。そして、あなたがたを選び、心から深く愛しておられる方である、と。

わたしたちは、この、父なる神さまに、子どものような信頼と安心を持って、呼び求めて良いのです。

不正な裁判官のたとえば、神さまが不正な裁判官のような方である、ということではなくて、この父なる神さまの恵みの存在を、さらに大きく強調している、たとえなのです。

<叫び求める先>

そして、わたしたちがもう一つ見つめたいのは、やもめのことです。

このやもめは、ただただ訴えていただけです。このたとえば、熱心さや努力は報われるとか、諦めなければ祈りが通じるとか、執念で相手を動かすことが出来るとか、そんな教訓ではないのです。やもめの訴えは、裁判官にとって鬱陶しかっただけに過ぎません。

まず、やもめは、何の力もない、まったく無力な存在です。そしてそれは、罪や死に対するわたしたち、この世での苦しみや悲しみに打ちのめされるわたしたちの姿そのものです。

そして、このやもめは、弱さと無力さの只中に居て、ただ願うこと、ただ叫ぶことしか出来なかった。やもめは、他に頼れる人もおらず、自分を守る武器もなく、裁きを行なってくれる者のところに行くしかなかった。しかも、それは不正な裁判官だったけれど、もうここに訴えるしか、方法がなかったのです。

そしてそれは、実は、わたしたちも同じはずです。本当に頼るべきところ、救いを求めるべきところは、本来、神さまのところしかないのです。

でも、わたしたちは自分の弱さや無力さを認めようとしないうちに、自分で何とかしようとしたり、人やモノに頼って解決しようとしたりします。しかし、それは最後の最後には、必ず堪えられなくなります。世の何が、人の罪を赦すことが出来るでしょうか。世の何が、人を死から救うことが出来るでしょうか。

わたしたちは最初から最後まで、まず祈りをもって、神さまに訴えていかなければなりません。神さまなしで何かをなそうとしても、それはいつしか人の思い、人の正しさを貫こうとすることになり、やがて虚しく崩れます。

わたしたちは、訴えるべき方、祈るべき方を知り、その方にひたすら向かって行かなければならないのです。

<祈りの恵み>

しかし、勘違いしてはならないのは、そのような、わたしたちの神さまに向かう姿勢や、努力や、祈りの熱心さが、神の国の完成を来たらせるのではない、ということです。

救いの完成は、神さまの御心に従って、神さまが定められた時に、神さまが完成させて下さいます。わたしたちには、それがいつか分かりません。ただ、待ち続けるのみです。

では、なぜ祈るのか。それは、わたしたちのためです。わたしたちが苦しみの只中にある時。弱さと無力さの只中にある時。訴えるべきところ、救いを求めるところは、神さまにしかない、と知っていることが大切なのです。

そして、その神さまが「父」と呼ばれることを喜んで下さる方である。わたしたちを愛し、救い、そして救いを完成させて下さる方であると、知っていることが大切なのです。

わたしたちが叫び求める時、祈る時、そこには必ず目の前に、生きておられる父なる神さまがいて下さいます。そこにおられるのは、命の造り主であり、すべての支配者であり、わたしたちをご自分の子として愛して下さる、父なる神です。その神が、近く、共にいて下さる。その大きな御手の中に置いて下さっている。わたしたちが祈る前から、神さまはわたしたちに目を向け、耳を傾けておられます。わたしたちは、祈りを通してこそ、この神さまとの交わりを経験し、その恵みを見出すことが出来るのです。

父なる神は、必ず祈りを聞いて下さっています。既に、祈りは聞かれています。神は、わたしたちをいつも見つめ、わたしたちの声にいつも耳を傾けておられます。そして、最も良い道を備え、必ず救いを実現して下さいます。だから、気を落とさずに、絶えず祈らなければならない。神さまにのみ、依り頼まなければならない。そこにのみ、救いがあるからです。

<憐れみの眼差し>

最後に、イエスさまはこう言われました。「しかし、人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見出すだろうか。」

人の子が来るとき、イエスさまが来て神の国を完成させて下さる時はまだ先のことであり、いつか分からないまま、わたしたちは待たなければなりません。それまでの間に、わたしたちが神さまに依り頼むことが出来なくなる。祈れなくなることもある。そんなわたしたちの弱さをよくご存じで、イエスさまは心配し、憐れみの眼差しで見つめておられます。

でも、だからこそイエスさまは、「気を落とさずに絶えず祈ること」を励まして下さったのです。苦しみや、悲しみや、困難を覚える時があっても、ひたすら十字架と復活の主を、見つめていなさい、と教えて下さったのです。

わたしたちが、昼も夜も叫び求める声は、確かに神さまに届いています。祈りは聞かれています。罪や弱さに打ちのめされる時であっても、絶望を覚える時であっても、まさにそのような叫びの只中にこそ、神の御子イエスさまご自身が来て下さって、わたしたちの叫びを、十字架上で叫んで下さったのです。わたしたちのために、苦しみを受けて下さったのです。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」。

ですから、わたしたちの絶望の叫びの只中にも、イエスさまは共におられます。わたしたちが見捨てられる場所は、イエスさまにあって、もはやどこにもないのです。

だから、わたしたちは、気を落とさずに、絶えず祈ることが出来るのです。祈りを通して、神さまと共にあり、イエスさまに支えられている恵みを見つめることによって、確かな希望と、忍耐する力とを与えられ、日々を生きることが出来るのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

わたしたちが、気落ちして、祈ることをやめることがありませんように。イエスさまの十字架と復活の救いを見つめ、今、その恵みに生かされていることを見つめ、神のご支配の完成を信じ、神さまに寄り頼んで、日々を生きる者として下さい。

この祈りの生活に、すべての人を招いて下さい。確かな拠り所、確かな命、確かな希望を与えられていることを知り、あなたに祈ることが出来る恵みを、一人でも多くの者が知ることが出来ますように。

イエスさまの御名によって祈ります。アーメン